各地からのたより

60周年企画として日ごろ大学から遠く離れていて、なかなか会合や練習に参加できないけれど、慶應大学バドミントン部のことを思っていて応援してくれるOBが全国にこんなにいることを近況報告も兼ねて寄稿を集めました。

中部地方より

昭和 40 年卒　**長谷川敏彦**
（名古屋在住）

部創立 60 周年と同じくして、私自身今年 60 歳の還暦を迎える一つの大きな節目であり、意義ある年として今後の飛躍につなげていく必要がある。

ここ名古屋、中部地区のOB会は毎年山田さん（昭和 37 年卒）をヘッドに 20 人強の幅広い層のメンバーで懇親を深めており、現役当時の懐かしい思い出話や、各自の近況などを旨い酒と料理をツマミにして楽しいひと時を過ごしている。ここ数年、参加者や頻度が若干減少傾向にあり、これを機会により盛り上げを図っていきたい。地域的にも富山や三重あたりにも広げて、より幅広くOB会参加を呼びかけていき、また関西地区との交流も面白い企画であり、こういった盛り上げ活動を推進してくれる若手OBの出現を期待したい。

中部地区は 2005 年愛知万博、中部国際空港などのビッグプロジェクトが進んでおり、大変な活況を呈している。OB会メンバーの中にも直接、間接何らかの形で関係している方々もおられ、こういった話題を中心に今後もOB会をより楽しいものにしていきたい。

私個人としては、昨年からバドミントンを通して地域活動に参加する機会を得ている。バドミントン教室（ジュニアー、家庭婦人）のお手伝いをしながら健康づくりを兼ねて楽しみながら良い汗をかかせてもらっています。こういった地道な底辺を広げる活動の中から、将来一線で活躍できる人材が一人でも出ることを願い、長い目で見て現役のバックアップに少しでもつながればと思っています。

昭和 40 年卒　**本山　秀昭**
（秋田在住）

えっ、あれからもう 37 年にもなるのか。原稿を依頼され、卒業してから何年経ったかを計算して、思わず愕然とした。私は 1965（昭和 40）年に慶應義塾体育会バドミントン部を卒業した。近頃たまに、俺は少しボケて来たのではないかと思うことがある。だが良く考えると、どうも今に始まったことで

はない。昔からそんな気配があったようである。細かな気配りなんぞトンと縁がなく、ボケッと考えている方が性に合っている。そんな私でも、慶應でのバドミントンの思い出は、今でも強烈で、とてもとても忘れられるものではない。

私は県立秋田高校の出身である。3 年の時県で優勝して、団体と個人複でインターハイに出場した。開催地の久留米まで汽車で揺られること 36 時間。疲れとすさまじい暑さの中、何がなんだかわからないうちに共に初戦で敗れた。でも全国のレベルを見ただけでご利益があったのか、秋の東北大会では単複共に 3 位になった。

慶應に進んでバドミントンを継続できて、本当に良かったと思っている。何しろ、すごい先輩に恵まれた。1 年の時 4 年生だった中村さん、山田さんは全日本複のチャンピオンであった。3 年生だった宮永さんは卒業してすぐに全日本の単を取った。おっかない先輩が揃っていた。何しろ強くて最初の頃は全然歯が立たなかった。田舎からポッと出てきたばかりのお兄ちゃんにとっては、目をパチクリするようなことばかり。そんな中で揉まれ、しごかれて、少しずつ腕が上がったようである。2 年の秋からリーグ戦に出してもらえて嬉しかった。もちろん当時は、関東学生一部リーグである。創部以来ずっと一部で、一部でプレーするのが当たり前であった。こんな事を書くと、三部で難儀している現役諸君に済まない気もするが、二部のことなど気にしたこともなかった。皆同じ感覚であったと思う。4 年間やって、リーグ戦、インカレ、共に優勝の経験は無い。が、4 年の時、秋のリーグ戦は 2 位、インカレも 2 位であった。インカレの個人戦では、キャプテンの長谷川君と組んで、これも 2 位であった。どちらも残念であったが、決勝戦の雰囲気は最高。あのような緊張感の中でプレーできて幸せだった。

いいことばかり書いたが、私には苦い思い出もある。忘れもしない 2 年夏の合宿。日吉であった。暑いのは当然であるが、夜まで暑く、しかも蚊がすごくてちっとも眠れない。コートに入れば遠慮容赦の無いシゴキ。そこで食らいついてこそ男だったのに、私は途中でこらえきれなくなり、脱走、離脱した。見込みがあるからこそ、たたいてくれたのだ。何という情けない。しかし分かっていても、体も心も耐えることができなかった。あの時は、もうバドミントンも慶應も辞めるつもりであった。家に帰っている時、同期の皆からやさしく説得され、恥ずかしながら翻意した。そしてその秋からレギュラーでリーグ戦に出してもらえた。何ということよ。楽して強くなれないのは当たり前。楽な目標で強くならないのも当たり前。1 年の頃は、練習の最後は、多摩川まで往復 10 キロのランニングであった。あの頃の貯金が現在の健康の土台であることは間違いない。

私は失敗の多い人生を送ってきた。その最たるものは、倒産である。もう 20 年以上も経つ。黙っていれば良いものを、何をこのおしゃべりめが、と思うが、参考になればと思い、恥をさらす。

菓子、食品の卸として本山商事は秋田県有数の存在であったが、1980 年 3 月、倒産した。私はその 3 ヶ月前に社長に就任していた。負債総額 20 億円。今では小さな額になってしまったが、当

時は秋田県史上 2 番目であった。後から思えば、回避する方法もあったようであるが、あの時点では致し方なかった。残念。多くの方に申し訳ない。しかし卸という業種の将来性に見切りをつけて、再建は選ばず、整理を選んだ。やるべきことは、ともかく精一杯の後始末をすること。一般債権者 200 社は半年。銀行関係 10 行は 1 年半かけて、全く任意で整理を終了した。卸の反省を踏まえて、出直しとしてモスバーガーを選んだ。そして必死で働いてきた。

昨年 10 月に、高校卒業 40 周年記念同期会が 115 名参加して盛大に開催された。私は、その実行委員長を仰せつかった。（我々同期の中には佐々木毅君＝東大総長、のようなとんでもない男もいる。）私は名誉欲など殆ど無い方なので、こんな役は煩わしいだけでちっともありがたくない。もっとふさわしい人が大勢いるのに、何で自分が、と考えたが、倒産後の後始末とその後の働きぶりを評価してくれたと分かった時は、嬉しかった。

人生失敗はつきもの。誰にだってある。大事なのは失敗した後、精一杯後始末して、また出直しをして一生懸命働く。その繰り返し。少しは失敗をこやしにしたかなとも思うが、まだまだ甘い。そうこうしているうちに、還暦が近づいてきた。これからはもっと人生を楽しまなくては、と考えて、20 年やって来たモスバーガーを 9 月で閉じた。

現役諸君、頑張れ！もし一部に復帰でもしたら、とんでもない数のOBが全国から集まりますよ。もちろん、私も駆けつけます。

志を高く

昭和 46 年卒　**中村久男**
（掛川在住）

（学生時代）

私は、昭和 22 年生まれの現在 54 歳、団塊の世代の第 1 陣である。現在掛川市に住み、静岡市にある県庁に勤務している。

昭和 42 年に一浪の末入学したが、当時どのような学生生活を送るかについて三つの選択肢があった。覚えたての囲碁をやるか、当時学生運動が盛んであったこともあり何らかの社会活動に関わるか、それとも高校時代 1 年程経験のあったバドミントンをやるかであった。しかし、囲碁は室内ゲームでありやや暗いイメージがあったこと、社会活動は将来に対するリスクを感じたこともあり、結局、面接時の試験官が偶然平良バドミントン部長でありその時先生に勧められたこともあり、一番明るいイメージのスポーツを選ぶことになった。

今振り返ってみるとこの3つの選択肢は、現在も私の生き方すべてに深く関わっていることを今回の原稿を書いていて改めて感じた。

さて、入部した当初の同期生は 20 人以上いたが多くは 1 年も経たず退部していった。結局、同期で 4 年間続けたのは福島由明主将、中村一郎主務、栗城幸輔、菅原元、唯一の女性の川崎美耶そして副将の私の 6 名であった。

部活動で一番の思い出といえば、最初の関東リーグ戦でのフルセットの末の勝利もあるが、3 年生のとき初めて慶早戦に出場し、負けた後のとめどない涙であった。何故あの時あんなに泣けたのか今でもわからない。恐らく無我夢中で全力を尽くした達成感と負けた悔しさなどが重なってカタルシス（浄化作用）となって一気に涙となって表れたとしか言いようの無い不思議な、しかも心地よい体験であり、現在に至るまでこうした気分を味わったことは無い。これは体育会という肉体的な限界に挑戦する環境下で初めて得られた体験であったと思う。

こうした経験以外にも、先生、監督、先輩、同輩、後輩との関係すべてが今思うとこれまでの人生の中で一番濃密であり、それだけに自分を知る多くの機会を得た 4 年間であったと思う。

（社会人時代）

就職活動には紆余曲折があったが、結局、出身地である静岡県庁に入ったのが昭和 46 年、今年で 32 年目に入った。当時は、地方の時代が叫ばれる少し前で東京志向が強い時代であったこともあり、慶應を出て地方の公務員になるのはごく稀で何か都落ちの感もあった。

しかし、今は静岡県庁でも 8600 人中慶應卒業者は 90 人近くおり毎年2～3 人が入り、女性も 8 人いる。しかも幹部あるいは幹部候補生として活躍している割合は高く、中央から地方への時代の流れを感じる。ただし、体育会出身者は相変わらず私一人というのは少しさびしい気もするが･･･。

県に入って最初の 6 年間は税金、土地改良に係る出先機関での勤務、この時代は若かったこともあり、組合運動もやり海外旅行にもよく行ったが中心はスポーツであった。夏のサッカー、冬のス

キーそして 20 代後半からはゴルフも始めた。

バドミントンについては、最初の転勤先でもある実家のある磐田市で、初心者教室を開き、市民大会を主催し、市バドミントン協会を仲間と共に創設した。

20 代終わりに本庁勤務になってからは、結婚したこともあり、仕事中心の生活となり教育、生活、文書、住宅、労働、文化、人事そして現在の福利厚生と様々な分野を経験してきた。この間、心掛けてきたことはどの配属先でもそこで何をやってきたか言えるものがあるかである。今も今日一日で何ができるかの思いで仕事をしているし、定年までの 6 年間も同じ気持ちでいたいと思っている。

仕事以外では、今「ふれあい囲碁」という簡単なルールの囲碁ゲームの普及にエネルギーを費やしている。このゲームは、日本棋院の安田九段が人と人の絆を深めたい、命を救いたいとの思いで始めた活動で、昨年 10 月富士市において天皇・皇后両陛下にこの「ふれあい囲碁」を見ていただく機会を得たことは望外のことでここにいたる多くの人との出会いの不思議さに驚いている。

さらに、この 9 月にはW杯サッカーの会場のエコパアリーナで 2,000 人を集める「遠州ふれあい囲碁祭り（仮称）」を企画しており、私の人生の中でも最大のイベントになるのではないかと緊張と多忙の今日この頃である。

（メッセージ）

今、世の中は大きな変革期、外にテロ、戦争などの紛争そしてその元にある極端な貧富の差、内にリストラ、いじめ、ひきこもりなどの暗い世相そしてその元にある心の貧しさ、志の低さである。

こうした中で、日本人に生まれ、慶應に学び、しかも体育会で鍛えられたことは大変恵まれたことであり、それだけに慶應の人間は世の中の先達として高い志をもって新しい社会作りを担う責務があると思う。生意気であるが人間にとって大切なことは、家族を含む社会に対して何ができるかである。その想いを授けてくれたのは、私にとっては一番に慶應に学んだことにあると思う。学生ストライキのため下宿先の近くにある図書館での哲学などの読書、猛暑の中での練習、全力で臨んだ試合そして先生、先輩をはじめとする多くの方から得た数々の教えは、今までのどの年代より実り多く私を鍛えてくれたと思う。

私は一地方のごく普通の 50 代の公務員ではあるが、今後も人生を楽しみながら少しでも自分と社会に対して志高く生きていくことができれば幸いであると考えている。

齢（よわい）還暦を祝う

昭和48年卒　上野　利三
（松坂在住）

ちょうど 30 年前の今日、私は部の主将を務め、創部 30 周年記念行事の真っ只中にいた。華やかな式典の中でさまざまな任を与えられていたが、そうした中で多少辛かったことは、練習不足を余儀なくされたにも拘わらず模範試合で単・複とも当時のインカレ No.1 とまともに相手をしなくてはならなかったことである。単は立教大の谷口君。複は法政大の草島・田所組。どちらもインターハイ

以来のライバルであり、知己でもあった。さすがに「上野は今日は調子がよくなさそうだ」と分かったらしく、できるだけラリーをつなげてくれて、好試合に見えるようにしてくれた。その時の、彼らの思いが今も頭の中に感覚的に残存している。うれしいことにこの三君とは今も交流が続いている。その後彼らはアジア大会など世界に飛び出していったが、日本のバドミントン界が、女子は3冠で世界に君臨し、男子は小島・秋山（中央大卒）両氏が世界の頂点に肉薄していた、最もよき時代といってよかった。公害渦巻く大都会の中を雨の日も両氏は 20kmは走っていたと聞いた。

記念行事で楽しかったことは、この際に部歌を作ろうということになり、その公募に応じて当選したことである。目黒の碑文谷の下宿で夜中の約 2 時間の間に 3 番まで作詞したものだった。2 番の第 1 小節を作曲を担当された小森昭宏氏が手直しされた。なるほど、と思った。「高い誇りと伝統受けて　力合わせて明日を築こう」の前半は、元は「今開かれん伝統の扉」となっていたが、これではリズムに乗りにくい。日吉の記念館をいつまでも練習のともし火が絶えることのないように不夜城に例えると、次々と詩のイメージが湧き出てきた。3 番の「見よ空高く映えある光り　丘にそびえる我らが城を　古い歴史に実と花添えて　今こそ進め若き我らよ　誓おうあしたは我らのものだ」が最初にできた（『50 年誌』には「実と花」のところが「一花」となっている）。それはそうと、今これは歌い継がれているのであろうか。部の存続はこの1節にあり、といいたいが・・・。

それから 30 年もの歳月が瞬く間に過ぎた。その間に起こった最も惜しまれることは、心に残る先輩方の死である。3 歳年上の佐藤さんは入部当時主将であり、若輩の私を何かと気遣って下さった。日吉の佐藤さんの下宿へもよく遊びに行った。金原（大嶋）さんは、試合に負けても目黒の自宅まで呼んで下さって近所のバー（コンパ）で気が晴れるまでカクテルをごちそうされ、自宅に泊めて下さり、枕を並べて眠りにつくまで語り合ったこと、度々である。結婚され駒込に移られてからも変わらなかった。李家さんは、札幌が勤務地であった時にそこで行われた東日本大会で鈴木さんと私のダブルスがベスト 4 に入った後に呼んで下さり、大きなカニをごちそうしていただいた。以来そのような美味しい高いカニは食べたことがない。そして岡本さん。4 年生の時に監督に就任されたが、それ以前からもよく銀座へ飲みに連れて行っていただいた。東日本大会シングルスベスト 4 に入れたことが、やや物足りないが低迷していた中でのせめてもの恩返しである。江戸っ子の気風をもった痛快な人であった。今では伝説となったほど豪気で後輩思いの吹野さんや、日本バドミントン協会の歴代理事長の中でも出色と思えるほど偉大な森友さん。私ごときが一言では言い表せないほどの偉人・賢人がこの部から出て、このわずか 30 年ばかりの間にあの世に旅立たれてしまった。だがこうした方々と生きた時代を共有できたことは生涯忘れ得ぬ幸せである。

その後私は道を誤ったかして大学院に針路を取った。この 20 年の間にちょうど 60 冊の本の出版に関わったが、単著としては 6 冊目の『前近代日本の法と政治－邪馬台国及び律令制の研究－』（北樹出版）を今年の 1 月に出すことができた。これには大学院で書き、ずっと温めていた 2 本の論文を収めた。記念の年に出版できたのも何かの縁であろうか。昨年刊行の『幕末維新期伊勢商人の文化史的研究』（多賀出版）と合わせ読まれればこんなにうれしいことはない。また昨今は県の選挙管理委員を務める関係上明治期の衆議院議員選挙史に関心を抱き、今年秋には刊行の予定である（和泉書院刊）。これら書物の中で皆さんといつでもお会いできることを願っている。

勤務先の松阪大学ではバドミントン部の部長をなんとか務め、三重県協会にも関わってきた。部は東海地域では 11勝目をあげ、中部地方では 3 勝したが、2 位止まりが 2 年続いている。西日本ではベスト 4 が 1 回、現在 3 回目のベスト 8 で先に進めないでいる。サントリーバドミントン部が健在だった時、監督の山本さんはよく言われた。「うちとお前の所の選手は慶應から生まれた兄弟の子、つまり従兄弟同士だ。だからいつでも練習に来い」と。慶應の選手はいってみれば直系である。いつまでも練習がし合えればよいと思う。近代バドミントンは質的に過去にないほど大きな転換を遂げた。これを理解しないと進歩はない。大きくなった三田バドミントンクラブは各地に散らばるOBが地域でまとまり、代表が上京して各々の現役支援策を述べるような組織化を提案した事がある。総会の日時にあわせて上京する事が殆ど不可能に近い地方人の願望である。ともあれ齢還暦に祝杯を！

福岡からのメッセージ

昭和50年卒　**桑野　隆裕**
（福岡在住）

私自身、今年で50歳の節目の年を迎えた。慶應義塾体育会バドミントン部の創部60周年を思うたびに、その伝統の重さを思い起こしている。

現在福岡市に在住しているが、昨今、当県はバドミントンの先進県。毎週のようにどこかの市立・区立の体育館では地元の大会が開かれ、塾出身者の出場はほとんど無いとは言うものの、競技としてのバドミントンの拡がりは大いに突出しているようだ。

この稿は全国の塾 OB からのメッセージという事であるのでここで少し「福岡」並びに私の近況について紹介させて頂きたい。福岡は今、日本で最も元気のある街と言われている。確かに九州内での福岡一極集中は日に日にその加速度を増すばかりで、経済的・文化的な集積度は点としての比較のみにおいては東京に迫るものがあると思う。アジアウィークズ誌が ASIA における最も住みやすい都市として福岡を“ベストシティ”に過去3回も選んでいることでもそれが証明されている。しかし一方では新福岡空港やアイランドシティ人工島、九州大学移転問題等々で都市として抱えている問題も少なくはないようだ。

さて、それでは福岡における慶大卒業生の会「福岡三田会」のことを少し触れておこう。現在会員数は約800名、私も常任幹事を引き受けているが、福岡の経済界における三田会員の活躍は実に目覚しいものがある。

先日、福岡三田会の例会に安西塾長をご招待し、ご講演を頂いた。

「慶応大学の卒業生は、経済社会・科学界・医学界・文化界といろいろな分野において常に本流を歩んでいかなければならない。」と説かれた安西塾長の自信に満ちたお話に久々に何か誇らしく、そしてすがすがしさを感じることができた。

ところで私事で恐縮だが今年2月に長女が結婚した。50歳にして花嫁の父となった訳だが、これがまた何か不思議な感覚であった。昨年慶應を卒業した次女も、まもなく結婚するという。立て続けの娘の結婚だが、相手も慶大卒だと聞いて一も二もなく許してしまった。50歳という年齢は一つの区切りの年である。これからも妻と2人、大いに人生を切り開き、楽しんで行きたいと思う。

ここで私が伝統ある慶應義塾大学体育会バドミントン部に在籍した4年間での最高の思い出について少し述べたい。

これはやはり何と言っても私にとって最後のシーズンとなった4年の秋季リーグ戦の事である。2部で優勝した塾は1部最下位の青山学院大学と入替戦を戦った。私が主将を務めていた塾チームは、当時2年生の梶田・茂木君や1年生からレギュラーであった宮崎君（現三洋電機チーム監督）を主力メンバーとする躍進途上のチームであった。

入替戦でのオーダー・戦績（昭和49年10月24日）

	慶應義塾	4-3	青学大
第1シングルス	桑野主将	2-1	長島主将
第2シングルス	梶田（2年）	2-0	笠野
第1ダブルス	宮崎・柳本	2-0	？
第2ダブルス	梶田・茂木	1-2	遠藤・畑中
第3ダブルス	桑野・玉利	1-2	長島・笠野
第3シングルス	宮崎（1年）	1-2	遠藤
第4シングルス	茂木（2年）	2-0	畑中

このように3対3の同スコアから第4シングルスで勝敗が決定するという大接戦であった。最後に茂木君が青学大の畑中を見事に破り、これが塾にとって悲願の1部復帰を果たした瞬間となった。この入替戦のトップシングルで主将戦を制して塾の勝利に貢献できたことが、私の約10年間のバドミントン競技生活の中でも最高の思い出であり、今もマッチポイントのサービスを打った時の手の感触を鮮明に覚えている。残念であったのは、そのまま卒業を迎え、一度も1部リーグ戦を経験する事ができなかった事だが、その後の下級生達の活躍には大いに満足し拍手を送り続けたものだ。

さて慶應の伝統ある行事の一つに卒業25周年の塾員を現役の卒業式に招待するというのがある。私も一昨年その感激を味わい、そして昨年は次女の卒業式であったため、2年連続して日吉記念館を訪れる機会を得た。その日は塾旗の入場を厳粛な気持ちで見ながら、そして塾歌を声を枯らして歌った。慶應義塾で学び、体育会で育った4年間、そして塾員として今あることの充実感を改めて感じ取る事ができたし、周りにいた同期生の顔からもそれを感じる事のできた素晴らしい一日であった。

昭和52年卒　**渡邉　真代**
（名古屋在住）

部創立60周年おめでとうございます

今年はまた大学卒業25周年にもあたり卒業式の招待も届きあらためて塾生であったことをうれしく実感しています．家庭に入り、ましてや地方に住んでいますと部ともだんだん疎遠になってしまいますが毎回のOB通信などは楽しみで試合結果報告には一喜一憂参加者のOB OGのお名前を見つけては懐かしいお顔が浮かんできます．地方より影ながらエールを送っています．

現在はスポーツとは無縁の生活をしていまして友人には私が体育会にいたと言っても信じてはもらえません．同期の女子が1人もいなかったので卒業後バドミントンの話をする相手もなく，子育てに追われ，引っ越しが多く一時期行先不明でOB通信も来なくなると私自身自分は慶応のバトミントン部にいたのだろうか，あの時代は何だったんだろうと思う頃も確かにありました．思い出を語り合える仲間が身近にいないのは寂しいものです．しかし人生も半ばに入り同期の方と連絡が取れるようになり OG会も年1回恒例化しました．毎回上京と言うわけにはいきませんがそこに行けば懐かしい方々に会えるのです．

また東海地方はもともとOBの方が多いのですが特にこの数年は52卒前後の先輩，後輩が名古屋にたくさん集まっています．歓迎会　忘年会　内輪の会などにお声をかけて頂き出かけていくようになりました．まさしく自分が一生懸命だった時代が蘇り懐かしい話，卒業後初めて知る話，忘れていることの方が多いのですが思い出に花が咲きます．名古屋にいらっしゃる機会がありましたら是非御連絡ください．東海OB会で(暖かく？)お迎えします．皆さん元気です！

そもそもバドミントン部に入ったのは女子高に入学し友人に誘われて見学に行った事からでした．初めての運動部でバドミントンを軽いスポーツだと考えていた私には古沢監督の指導は大変厳しいもので我ながらよくやめなかったと今でも不思議です．

当初10数名の1年生がいましたが卒業する時点では2人になっていました．体育会の方々には随分お世話になっていましたし，キャプテンをしていた責任もあり迷いましたが高校卒業と同時に体育会に入りました．けれども当時女子高の先輩で何かと面倒をみて下さっていた川崎さん，田村さん（沢谷さん），堀切さん（野口さん）の存在が大きかったです．とても素敵な方々で私達にとっては憧れの存在でした．あのような先輩になりたいと思う気持ちが強かったように思います．大学の3年間は菱山さん（福山さん），斉藤さん（関口さん）との3人で3部残留，女子部の存続に一生懸命でした．4年生の時新入生として入部してきた中村さん（茂木さん）達の代が原動力となり後に1部復帰という立派な成績を残してくれた事も忘れられない思い出です．

今日この60周年を迎える塾バドミントン部の長い歴史の中延々とつながる鎖ひとつ分の働きの出来ましたことを今はとてもうれしく思います.

昭和53年卒　**梶田和也**
（名古屋在住）

部創立 60 周年おめでとうございます。ついこの間 50 周年と思っていたのですが、早いものでもう 10 年経過しました。私自身いたずらに歳を重ね、髪や髭に白いものが目立ち始め、時の流れの早さを痛感しています。まさに「歳月人を待たず」です。

1974 年春、森進一の「襟裳岬」がヒットしていた頃入学、名古屋から上京して来たのですが、当時同じ高校出身の先輩がバドミントン部で活躍されていたこともあり、迷うことなく入部しました。

まず、びっくりしたのは、高校生と同様、体育会生は普段詰襟を着用することでした。当時、私は愚かなことに、体育会と同好会の違いもわかっておらず、正直、部活動を少々サークル的なものに捉えていたのです。“学ラン姿のバンカラ硬派”に映った先輩達を見て、大いに気が引き締まったのを憶えています。もっとも、そのイメージがいささか偏っていたと気付くのに、それ程時間はかからなかったのですが・・・？

さて肝心の現役時代を振り返ってみると、何と言っても印象深いのは、3 年生と 4 年生の時の慶早戦です。加えてその間の 1 年は、大げさに言えば、茫然自失の底から這い上がり、喜色満面の絶頂で曲がりなりにもゴールを迎えた貴重な学生生活最後の 1 年でもありました。

私が 3 年生の時は、4 年生の梶田主将のもと（通称、大カジさん、同姓の為、背丈を反映して私は小カジと呼ばれていました）春季リーグ戦で 1 部に昇格、夏の韓国遠征と部全体が熱気に包まれ、当然、慶早戦も久々の勝利かと、選手のみならず、OB諸兄も並々ならぬ期待を寄せていました。幸いに、私もダブルス、シングルスに出場することになり、内心、「両方とも勝って大いに慶應勝利に貢献し・・・」と小さな胸を燃やしていました。裏返せば、訳もなく、「何となく勝てるのでは」とただ単に気負っていただけなのですが。早稲田の対戦相手は両試合とも北関東出身の O 選手でした。

いざ早稲田の体育館で試合は始まったのですが、どういう訳かシャトルがベキベキに外側に折られていて、何だか全然飛びません。いや、そう感じただけかも知れないのですが。あっという間に、1セット取られ、第 2 セットもあれよあれよとゲームセット、ダブルス、シングルス両方ともまさかの惨敗。何ともふがいない試合をしてしまいました。気負いが完全に勇み足となったのです。

この敗戦は、当然、塾の気勢をそぐことになり、結果6－9で団体戦は予想外の敗戦となりました。応援してくれた控えの選手達、駆けつけて下さった OB の人達とまともに顔を合わせられず、自分のだらしなさに腹が立つやら、情けないやら・・・。恒例の試合後の交歓会では、居場所がなくて、本当に穴があったら入りたい、その場から消え去りたい一心でした。おまけに、後になって気づいたのですが、どうやら飛ばないシャトルを無理して力まかせに叩いたせいか、腰を痛めてしまったのです。以後、現役引退までこの腰痛に悩まされることとなりました。

それから 1 年、荻窪の針灸院に時折通院しながらの練習が毎日続き、4 年生最後の慶早戦を迎えたのですが、特に、直前の夏休みの練習は実に苛酷なものでした。基礎体力作りのトレーニングが延々と続き、更に合宿にいたっては、連続 2 時間以上も2－1で上級生がコートで転げ回るというハードな内容でした。皆、歯をくいしばって猛練習についていったのですが、それも前年の悔しい思いがあったからこそで、私自身、現役時代で一番、身も心も練習に打ち込んだ期間ではなかったかと思います。元々、慶早戦に向けてのレギュラー中心の夏季練習は主将の宮崎君の発案でしたが、部員全員が一丸となって、張りつめながらも、溌剌とした雰囲気で慶早戦に臨むことができました。

そして試合当日、またしても早稲田の対戦相手はダブルス、シングルスとも、宿敵 O 選手。ただやるだけの練習は十分積んできたという自信か、はたまた単純な開き直りか、運良く両試合とも雪辱を果すことができました。試合後、偶然、洗面所に居合わせた O 選手から「おめでとう、良かったね。」と言われて、何かずっとあった胸のつかえがおりたような、スッキリとした爽快な気分になったことを、今でもよく憶えています。

団体戦も結果11－4と大勝で、故大嶋監督以下を次々と胴上げした記憶も、汗の臭いと相まって、つい昨日のことのように蘇えってきます。本当に最後の慶早戦で 13 年ぶりの勝利で有終の美を飾れた我々は、非常にラッキーであり、幸せでした。

我々の勝利は、平部長、今は亡き大嶋監督、鈴木コーチを始めとするOB諸先輩方、レギュラーを支えてくれた仲間の部員たちの応援によるものと、改めて感じ入っています。

最後に、矛盾するようですが、勝敗ばかりが全てとは思わないのです。幾多の失敗を乗り越え、全力でぶつかっていった経験は貴重で、そこで培ったハートは今でも綿々と鼓動しています。そんな粘り強いハートを与えてくれたバドミントンに感謝したいと思います。

今も、密かに耳を澄ますと、「ファイトォー」「ソォーイ」と懐かしい掛け声が聞こえてくるようです。

昭和57年卒　中 村 時 広
（松山在住）

バドミントン部創立60周年、誠におめでとう。卒業の翌年に40周年を迎えたと記憶しているので、以来20年、改めて時の流れの速さを痛感する。

寄稿文のご案内を頂いた時には、入部から4年間の青春時代に思いを馳せ、懐かしさに浸ったものである。練習、合宿、試合、先輩・同僚・後輩、日吉の町並み、記念館、どれをとっても忘れ得ぬシーンが、脳裏に鮮やかに蘇ってくる。

そして今、学生時代にクラブで経験した一つ一つの積み重ねが、現在の自分に繋がっていることをつくづく感じてもいる。

卒業後、商社マンとして毎晩深夜までの残業に明け暮れた時も、政治家として選挙で激しい戦いに挑む時も、落選して試練の日々に立ち向かう時も、クラブで鍛え上げた体力と精神力、そして4年間やり通した自信が支えとなってきたことは言うまでもない。

また同世代の面々との再会時は、心から楽しめる瞬間でもある。昔話に花が咲き、お互い社会人としてそれぞれに立場にあっても、先輩・後輩の良き関係（？）は決して変わることはない。こうしたことは、全ての塾バドミントン部卒業生が共有する財産なのではないだろうか。

7年ほど前に日吉を訪れた時、その変貌ぶりには目を見張らされた。日吉駅は地下となり、立派な駅ビルがそびえ立ち、学生時代に空腹を満たしてくれた食堂やレストランはその姿すら見ることができなかった。

しかしながら、記念館はもとより、少し黄ばみがかったシャリが持ち味の「梅ずし」や、悲鳴を上げたクロカンコースは健在で、それら新旧が織りなす独特の情景は、そこはかとなく悲しく、そこはかとなく嬉しいものであった。

卒業時、激しくも苦しい競技であるバドミントンは2度とやるまいと思っていたのだが、最近は時折ラケットを握っている。ゲームに興じることが最高のストレス解消にもなっており、バドミントンを通じて出会えた良き知人もその数を知らない。

また松山市の家庭婦人バドミントン協会会長として競技のお世話などもする立場にあり、ここ数年で地元に全日本教職員大会、クイーンズカップ、全日本実業団選手権などの大会も誘致された。各大会には塾バドミントン部OBもお越しになり、おいしい酒を酌み交わす機会ともなった。

私は現在松山市長として、まちづくりに日々邁進している。人口50万人、日本最古の温泉である「道後温泉」、築城400年を迎える「松山城」、「坊ちゃん」や「坂の上の雲」といった文学作品の舞台、時速10㎞の「坊ちゃん列車」が走るまち、近代俳句の父「正岡子規」の故郷など、多くの魅力に満ち溢れたところである。

また、松山商業を筆頭とした野球熱の高い土地柄でもあり、今年はわがまちの「坊ちゃんスタジアム」がプロ野球オールスターゲームの舞台にもなる。

バドミントンはお隣の高松市が強く、松山市はそれほどでもないが、今後は関係者と共にテコ入れをしてゆき、地元から塾バドミントン部に選手を送り出せる日がくることを夢に見たいと思う。

いかなる立場にあろうとも、いかなる場所に住もうとも、いかなる年齢になろうとも、所属した全ての人々にとって、慶應義塾体育会バドミントン部は心の拠り所であることに変わりはない。

先輩、後輩の皆さんで、もし松山にお越しになる機会があれば、同じ拠り所を持つものとして心より歓迎させて頂くので、ご一報下さればと思う。

そして現役の皆さんには、歴史ある塾バドミントン部の後継者としての誇りを持ちながら、これからも全力で頑張って頂きたい。

昭和59年卒　**永井 悟**
（山形在住）

慶應義塾バドミントン部創部60周年誠におめでとうございます。

大学3年生の時に40周年をお祝いした。それから20年も経ってしまったのかとの思いが強い。今、山形の自宅で昔の事を思い出し懐かしんでいるところである。

現役時代の4年間どのような気持ちでバドミントンをやっていたか思い出してみた。

1年生、本当に大変だった。毎日が「罰則」との戦いであった。必ず何か事件が起きていた、・体操の号令を間違えた・練習前の掃除を忘れた（当時の記念館のフロアーは古くてモップをかけないと埃が白く見えてごまかせなかった）・元気がない etc.特に馬場が夏合宿の時に「部旗」を持ってくるのを忘れた時は、生きた心地がしなかった。

2年生、レギュラー争いに必死だった。水村・永井組と内田先輩・小柳組がリーグ戦の第3ダブルスの座を争っていた。リーグ戦には水村・永井組が第1戦に出場したが負けてしまった、第2戦には内田・小柳組が出場し勝ってしまった。第3戦も内田・小柳組が勝ってしまった。不謹慎ながら、早く負けてくれと願っていた。

3年生、1部昇格に向け必死だった。前年の秋のリーグ戦では、圧倒的な強さで2部優勝したものの、青学との入替戦に敗れ2部残留となっている。前年の4年生レギュラーの卒業に加えダブルスの小柳が骨折している。リーグ戦のメンバーになるのではなく、リーグ戦で勝つ事が必要であったし、勝つ事に執着していた。不謹慎ながら、自分が試合に出ないでチームが勝つ事はできないものかを真面目に考えていた。薄氷を踏む思いではあったが、2部優勝！青学との入替戦は、トップシングル渡辺主将の本当に信じられない勝利で波にのり、圧勝してしまった。念願の1部復帰である。

4年生、打倒！早稲田であった。早慶戦に加え、春秋リーグ戦での対決がある。リーグ戦での対決は最終日、5位をかけての対戦である。法政大学の1年先輩の五十嵐さんとは、山形地区バドミントン協会の関係でよく顔を合わせるが「慶應も早稲田も、早慶戦の時は、端で見ていてもあきれるくらい必死にやっていた。」とよく言われる。春のリーグ戦は早稲田に勝ち5位になったが、秋は負け2部との入替戦となった。筑波大学との入替戦は、一進一退で進み、ついに3対3で私の最終シングル決戦になってしまった。相手は田中君、1ゲームをセッティングでとり、2ゲーム目に入ったところで、学連が借りていた体育館が時間切れとなり最終シングルだけがサスペンド、再試合となった。再試合はインカレを間に挟んでの約1ヶ月後、場所は早稲田の体育館。私のシングル1試合に1部残留がかかっている、当日体調を崩しても交替はできない、ずっと緊張していた。筑波大学が田中君とその練習相手だけがアップしたのに対して、当チームは全員でアップを行い全員で乱打を打ち雰囲気を盛り上げてくれた。応援も、リーグ戦では禁止されていた「ワッショイ」であった。現役最後の試合が、1部残留を決めるものとなり本当に嬉しかった。いろいろあったが、終わりよければすべてよし、充実した4年間であった。

最近もバドミントンに関わりを持っている。息子と娘がスポーツ少年団でバドミントンを始めてから、毎週ラケットを握るようになった。今は、息子は中学の部活へ娘は山形県小学生の強化合宿に妻と出かけていて私一人である。

バドミントン王国山形（山形ではみんなこう言っている）の復活に向けて山形県ジュニアバドミン

トン協会も発足し理事に任命されてしまった。ジュニアの試合を中心にその運営に駆り出されている状況である。小学生、中学生、高校生とその子供たちのバドミントンの成長ぶりを見ているのは面白く、塾のバドミントン部で活躍してくれる選手が早く出てきてくれる事を夢見て指導にあたっている。現役諸君も、たまには地方の高校に出向いて勧誘をしてみてはどうだろうかと思う。きっとその土地のOBは、暖かく迎えてくれるはずです。

最後に、私の現在の勤務地である米沢市は上杉鷹山で有名な土地である。その鷹山翁の語録に

「　なせば成る　なさねば成らぬ　何事も

　　成らぬは人の　なさぬなりけり　　」

と言う言葉がある。最近まで、上の部分しか知らなかったが下の部分を知ってから、いつも自分に言い聞かせている言葉である。慶應義塾体育会には「練習ハ　不可能ヲ　可能ニス」という名言がある。

何を「成す」のか、何を「可能ニス」るのか考えて行こう、現役諸君の頑張りに期待したい。

部創立60周年に当たって

昭和60年卒　**阿部信正**
（青森在住）

慶応義塾体育会バドミントン部創立60周年おめでとうございます。

私,卒業以来17年間転勤を繰り返し、今回は北の青森から寄稿させて頂きます。青森の冬の降雪量は凄まじく、市内で累積10m近くになることもあります。こうなったら冬はもっぱらスキー三昧で、なんと5月の連休まで八甲田山で楽しめます。また仕事で行った某大学キャンパスでカッコウが鳴いていた時はさすがに驚きました。

こんな大自然に囲まれてゴルフは満喫していますが、残念ながら青森ではバドミントンをやる人をほとんど見かけず、ここ数年ラケットは埃がかぶりガットも弛みっぱなしです。

さて早いもので今から21年前、怠惰な学生生活から決別し、何か完全燃焼できるものを求めてバドミントン部に入部した日を懐かしく思い出します。体育会に初心者で入る無謀さを当時は知らず、今でも思い出すたびにゾッとします。ただ既に初心者入部の先輩方が部に溶け込んでいるのを見て安心しました。

勝ちたいという情熱、勝つ為の創意工夫、そしてなによりバドミントンを愛する気持ちを仲間と共有できた経験は忘れ難い思い出になっています。肉体を鍛え抜くだけでなく、考えること

の楽しさを緒先輩に教えてもらい、それに共感する仲間が大勢いたことで一層バドミントン部、そしてバドミントンそのものに愛着を持つことができました。

久しぶりに 50 年史を見ていたら草場律君が慶応バドミントン部におけるルネッサンスと当時を表現しており、変革し新しいものを追及していこうという気分が満ちていました。しかし、それに加えて日本最古の大学バドミントン部という歴史、伝統がもたらす無言のプレッシャーや恥ずかしい姿は見せられないという重圧が強いほど、4年間ベンチを暖めることがほとんどであった私が言うのもなんですが、逆に自分を鍛えてくれたように思います。恥ずかしながら今でも時々落第する夢と、苦しくてバドミントン部を誰にも言わずに突然退部してしまう夢を見ます。

貴重な時間を割いてもらい諸先輩より素振り・フットワークから教えて頂きましたが、戦力にならない初心者の世話をしてもらい差別なく同じ土俵に上げてもらえたことは、その頃の標準的な体育会のイメージを超えて懐の深さを感じました。

社会人になりどんなに辛くても今まで泣いたことはありませんが、大西主将の時に 1 部へ昇格できなかった後の打ち上げで思わず皆で泣き、次の年渡辺主将の時に入れ替え戦で勝ち、自分は応援するのみでしたが迫力ある試合にただただ感動しました。

馬場主将率いる1983年 1 部リーグ戦、小柳さんの開発した魔球サーブが炸裂し相手が動揺する様子は自分にとって革新を象徴するルネッサンスそのものでした。

既に勝負の決まった対日大戦の第4シングルスで馬場主将が誰か試合に出たい者はいるかと聞いた時、皆が一瞬躊躇した隙に私が手を挙げたら本当に出る事になってしまい、あまりに場違いな選手登場でしたし、天井のライトが眩しくてクラクラきたのを今でも思い出して冷や汗が出ます。
皆さん、同好会ではあるまいしリーグ戦出場はおろか公式戦のシングルスで1勝もしたことない男を私よりはるかに強い同輩、後輩がいたにもかかわらず送り出す体育会が他に存在したでしょうか。
日大の応援している1年生のほうがよほど強かったでしょう。この経験は自分の記憶に深く刻み込まれていますし、社会人になって今に至るまでチャンスを与えられることの貴重さ、チャンスを与えることの大切さを常に感じています。

今改めて私はあらゆる意味で勝負すること、結果を出すことが大切だと思っています。
実際社会ではなかなか白黒つかず、また何が勝ちでなにが負けなのかもはっきりしません。しかし結果を出すことでそれが良い結果であれ悪い結果であれ後で貴重な財産になります。
基本はバドミントンをやっていても社会人をやっていても一緒だと思いますが、自分の経験では勝負を避けたときは結果負けたときよりも質が悪いとつくづく感じます。

ところで最近、学生に体育会の人気がないと聞きます。
これほどまでに個人の人間形成に大きな影響を与える可能性のある場を現役の皆さんもより一層大切にして下さい。短い4年間であるからこそ手軽に？自分を追い込めますし完全燃焼もできます。卒業するとなかなか完全燃焼というわけにはいきません。

最後になりますが、勝負にとことんこだわりながら尚かつ勝負を超越し自己革新していく。勝負に勝ったら楽しいし、負けたら悔しいけどそれでもやっぱり楽しい。どちらにしても前へ、未来へ進んで行く。

慶応義塾体育会バドミントン部は40年後の100周年になってもそんなチームであって欲しいし自分もそうありたいと思っています。

「部創立60周年に当たって」

昭和61年卒　木村　能成
（徳島在住）

創部60周年おめでとうございます。ついこの前、創部50周年だったと思ったが、年をとったせいか、月日が経つのは早いもので、あっという間の10年だった様な気がする。

卒業して、早16年経ち、内6年間仕事上で東京にいたが、10年は地方勤務（広島6年、大阪3年、徳島3ヶ月）で、なかなか部に貢献できず、申し訳ないという気持ちで、原稿を書いている。

現在、徳島に家族4人と一緒におり、長女が小学校4年、次女が2年生、三女が幼稚園年少と、3人の娘と女房の女4人に囲まれ、男一人頑張っている。長女が小学校でバドミントンを始めており、時々相手をしているが、昔の感覚でやろうとしても、体が動かず苦労している。（ラケットは卒業時の物をそのまま使用、ガットは伸びきっている。）

徳島はバドミントンが結構盛んで、もし、高校生の勧誘等で四国の選手がいれば喜んで協力するつもりだ。（主務時代経験した、インターハイ勧誘を忘れられない？）

さて、大学時代の思い出を書かせて頂くと、思い出すのはきつかった練習と、良き先輩、同期、後輩にめぐりあえたという事につきる。また、主務を勤め、多くの先輩方と接することが出来、その後の人生に非常に役立ったこと、そして初心者で入部し4年間続けたこと、最後の慶早戦に出場できたこと（練習は不可能を可能にするを実感できた）等、自分なりに良く頑張ったと思う。初心者で入部した者の目線で、思い出を書こうと思う。

＜大学1年の時＞

不思議といろいろなことが思い出される。右も左もわからず、ただ体を鍛えたいという安易な気持ちで記念館へ行った時、言葉巧み？に勧誘をされ入部（確か小柳さん、阿部さんから初心者でも頑張ればレギュラーになれると言われ、同郷の K 君と入部）。いざ練習を見ると、みんなの動き、シャトルの動きが早いのなんので、絶句。女性にも、全く歯がたたず、苦しい1年だった。何度もやめようと思ったが先輩に説得され、継続。因みに一緒に入部した同郷の K 君はやめて、軟式庭球部に入部。初心者が3人（渡辺、大迫両君）いたことと、Bグループの優しい先輩達？（平野さん、神良さん、岡本さん、阿部さん）に助けられ、何とか1年間続けることができた。また、連帯責任の罰則制度や夏冬の三越でのアルバイト等により、同期と一体感ができた。（連帯責任は当時つらかったが、非常にいい経験であった。また、三越でのお歳暮・お中元の梱包は今も自慢できる？特技の

ひとつとなった。）
＜大学2年の時＞
　1年間厳しい練習に耐え、体力的にもついていける自信がついて、ようやく部の一員になれたような気がした。（特に1年の最後の春合宿＜トヨタ＞はきつかったが、急成長した気がした。また、打上げの飲会は凄まじく、その後の飲会の中でも、一番の失態だった。中でも永井と自分はひどかったらしい？）
　後輩も入部し、漸く女性とも試合らしい試合となり（情けないが）自分なりにいろいろ考えて練習するようになった。同時に同期の部の役割が決まって、自分は主務ライン（平野さん、岡本さんにいろいろ教育された）が早々と決まった。それまで主務はレギュラーにはなれないとの思いがあったが、リーグ戦は難しいが、慶早戦はチャンスあり、平野さん、岡本さんと共に（一応）練習に励んだ。
＜大学3年の時＞
　いよいよ上級生となり、責任も重大。主務岡本さんをサポートして、副務として部の運営に貢献。特に慶早戦の準備では実務全て担当、非常にいい経験ができた。（失敗談では春合宿があった。群馬の猿ケ京で行い顰蹙を買う？回りは雪で、日吉の方が暖かかった）
＜大学4年の時＞
　佐藤主将、永井副将、服部トレーナー、渡辺関東学連委員長、臼井（現永井）女子主将、そして自分が主務となり、同期一丸となり部を運営（お互い我が強く、よく言合いになったが、最終的にはまとまっていた）、リーグ戦では何とか2部を死守できた。（有望選手の入部無く、非常に苦しい時代だった）個人的には裏方に徹しながら、最後の慶早戦に出場できたこと、そして4年間体育会バドミントン部を続けることができたことが、人生における財産となった。初心者でも4年間続けることができたのも、この部の良き伝統、先輩、同期、後輩のお陰と感謝したい。
　最後になるが、地方にいてもバドミントン部を忘れずにいる多くの先輩がいること、そして現役諸君を応援していることを忘れずに。バドミントン部の益々の発展、2部、そして1部復帰期待しています。

創部60周年おめでとうございます

昭和61年卒　**服部　勲**
（ロンドン在住）

　仕事の都合で昨年末よりロンドンに駐在しております。奇しくもバドミントン発祥の地である英国に来たことはまた何かの縁とも言えるかもしれません。
さて、私がバドミントンによって教えられた事を挙げるとすれば2つあります。
　一つには、1＋1は必ずしも2になるとは限らない、ということ。もう一つは、相手の考えを確実に読む取る力がいかに大切であるか、ということです。現役時代の私は特にダブルスが好きで、今で

もTV中継がある時はダブルスを好んで観戦しています。ダブルスがおもしろいのは、仮にシングルスでTOPの実力があるプレーヤが二人パートナーを組んだとしても、その力が 100%他を凌駕するとは限らないことにあります。これはバドミントンに限った話ではありませんが、・・・。言い換えると、私のような平凡なプレーヤでもパートナーとのコンビネーションで 200%, 300%の力を発揮することが可能であるということでもあるわけです。つまり、1＋1＝∞の可能性を持っている事になります。（場合によっては、0にもなりますが）

ところで、試合の流れの中で相手が打ってくる打球の種類（スマッシュ・カット・ドリブンなど）が気持ちよいほど予測できたことはありませんか？（たとえ試合中のほんのわずかな間でも）私は実戦の中でこのような経験を何度も体験し、この時ほどバドミントンを楽しいと思った時は他にありません。特にパートナーも同じように感じた時は最高に楽しくプレーができます。今振り返ると私はこの体験をしたいがため苦しい練習をしバドミントンを続けていたような気がします。相手の打球を予測するためには自分が瞬時にシミュレーションしたコース・球種を打ち込まない事には成立しません。もしそれができなかった時は、また最初からシミュレーションをスタートしなければなりません。このシミュレーションのパターンが増えていくことで、楽しいバドミントンの時間が増加していきます。

この度、この異国の地に赴任しあたかもダブルスの様に英国人スタッフと2人3脚で仕事に取り組んでおります。また、言葉と文化の壁の中で、顧客との駆け引きはまさにダブルスのシミュレーションの様なものです。赴任間もなくまだまだ、ダブルスのコンビネーションも未熟であり、シミュレーションのパターンを増やすべく練習も十分ではないため、気持ちよく仕事を進められた機会は極わずかですが、バドミントンによって教えられた事を信じこれからの苦しい経験（練習）の中から楽しく仕事を進められることを夢見ています。

遠い北の国から、皆様のご活躍を期待しております。

昭和63年卒　安保　実
（大府市在住）

早いもので卒業後14年経ったということに驚くと同時に、60周年記念誌に寄稿できることを、非常に光栄に思います。

ご依頼が「日本全国からのメッセージ」として近況を　ということでしたので、私自身の事及び名古屋地区のOBの方々について触れさせていただきます。

まず、私自身について述べさせていただくと、‘88年に卒業後（株）デンソーに入社し、本社が愛知県刈谷市なので、それ以来愛知県に在住しております。入社後4年間は人事で採用を担当しておりましたので、慶應含め東京の大学への出張もあり、その都度同期と飲みに行くこともありましたが、人事から調達部門に異動してからは、関東方面の仕入先の工場への出張はあるものの、東京を通り過ぎることがほとんどで、すっかりご無沙汰になっています。言い訳が、長くなってしまいましたが、卒業後に部の行事に参加させていただいたのは、1度くらいだったようで反省しております。

今回の原稿も遅れて申し訳ありません・・・。

バドミントンの方は年に2回、服部さん（‘86年卒）に引きずり込まれた？クラブチームでラケットを握っている程度です。最近、私の妻も子供の幼稚園の母親クラブでバドミントンを始めたようですが、茂木百合さん（‘80年卒）さんから「夫婦でやると喧嘩になるから絶対やっちゃダメよ。」とアドバイス？いただいたので、いまだに妻と一緒にやったことはありません・・・。そろそろ一度くらいは一緒にやろうかと考え始めております。

さて、名古屋地区では4～5年前から黒沢さん（‘82年卒）、大西さん（‘82年卒）のご発案で、名古屋地区のOBで集まりを持つようになりました。00年の出席者リストが私のパソコンに残っておりましたので、ご紹介させていただきます。

山田さん（‘62年卒）、長谷川さん（‘65年卒）、山本さん（‘70年卒）、横井さん（‘75年卒）、佐々木さん（‘75年卒）、花田さん（‘76年卒）、茂木秀之さん（‘77年卒）、梶田さん（‘78年卒）、茂木百合さん、黒沢さん、大西さん、鈴木さん（‘83年卒）、服部さん、池田君（’94年卒）、安保　の以上15名。

同じ00年には岐阜インターハイの勧誘に来られていた平井さん（’70年卒）、森下監督、現役に名古屋まで足を伸ばしていただき、長谷川さん、服部さん、池田君にご尽力いただき、多数のOBに参加いただき激励会を開催し、夜遅くまでお付き合いいただきました。

また年に1回、バドミントン部だけでなく東海地区体育会OBの集まり（当部は大西さんが幹事をされています）がありますが、01年度は当部からは梶田さん、大西さん、木村君（’88年卒）、私の4人が出席しました。

私が卒業してから、名古屋地区OBで私と現役時代に重なっていたのは同じ会社の服部さん（01年末イギリスへ赴任）だけでしたが、昨年春に同期の木村君が名古屋勤務となり非常に心強く思います。当地区の盛上げ役の一翼を担ってくれるでしょう。

OB、現役の皆様、名古屋地区にお越しになる際は、一声お掛けいただければ歓迎会をセッティングさせていただきますので、是非ご連絡下さい。